

# 血液検査の見方



今日の血液検査結果はいかがでしたか？ ご自宅に帰られてから見直す場合にも参考になるように、簡単に各項目を解説します。分かりにくいところは、遠慮なくお聞きください。

## 血液一般（貧血や感染、炎症のチェック）

- ・ **WBC（白血球）**：傷や炎症があると増加し、体外から侵入してきた細菌をやっつけます。
- ・ **RBC（赤血球）**：酸素を運ぶヘモグロビンを含んでおり、少ないと貧血になります。しかし、多すぎると血液の流れが悪くなります。
- ・ **Hb（ヘモグロビン）**：赤血球の中にある赤い色素で、肺で酸素を受け取り全身に運びます。全身の細胞で酸素が消費されて産生される二酸化炭素を回収し、肺で新しい酸素と交換します。貧血は通常このヘモグロビンが減少している状態を指します。喫煙した際には、一酸化炭素が酸素よりも強い力でヘモグロビンと結びつくため、体は酸欠状態になります。
- ・ **Ht（ヘマトクリット）**：血液中に含まれる赤血球の割合を示しています。
- ・ **MCV（平均赤血球容積）**・**MCHC（平均赤血球ヘモグロビン濃度）**・**MCH（平均赤血球色素量**：いずれも、貧血の種類を特定したり、原因を推定するのに役立ちます。
- ・ **血小板**：血液を固め、出血を止める働きがあります。減少すると出血が止まりにくくなります。

## 肝機能

- ・ **AST（GOT）**・**ALT（GPT）**・**γ-GTP**：いずれも肝細胞の中にある酵素で、脂肪肝やお酒の飲みすぎなどで肝臓が障害されると、血液中に漏れ出て数値が上がります。
- ・ **ALP（アルカリホスファターゼ）**：肝臓、骨、腸などで作られる酵素で、胆汁の流れが悪いと上昇します。また、成長期の子供では骨の成長により非常に高くなります。
- ・ **LDH**：肝臓以外に腎臓、肺、心筋、骨格筋にも含まれているので、激しい運動をすると上昇します。



## 脂質

- ・ **TCH（総コレステロール）**：細胞膜やホルモンの生成に必要な物質ですが、増えすぎると動脈硬化を進行させます。閉経後の女性は高くなる傾向があります。
- ・ **HDL-cho（HDL コレステロール）**：余分なコレステロールを回収して肝臓に戻す働きがあり、血管壁へコレステロールが沈着するのを防ぐので、善玉コレステロールと呼ばれます。
- ・ **LDL-cho（LDL コレステロール）**：体のすみずみにコレステロールを運び、多すぎると血管にたまって動脈硬化を進行させるので、悪玉コレステロールと呼ばれます。直接測定する方法と、計算で求める方法があり、一長一短ですので、最近では **nonHDL-cho**（善玉コレステロール以外のコレステロール）で判断することがあります。

- ・ **TG（中性脂肪）**：脂質のひとつで、内臓脂肪（脂肪肝など）を増加させやすい因子です。直前の食事の影響を受けやすいので、少なくとも6時間以上飲食をせずに（水やお茶を除く）採血すると、正しい数値が測定できます。

## 腎・尿代謝

- ・ **BUN（尿素窒素）**：「蛋白の燃えカス」で、腎臓からろ過されて尿中に排泄されます。腎機能が悪くなると、ろ過しきれずに数値があがります。
- ・ **Cre（クレアチニン）**：筋肉から出る老廃物で、腎臓でろ過された後、尿中に排泄されます。腎機能が悪くなると排泄量が低下して、クレアチニン値が上昇します。しかし、年をとって筋肉量が減少すると、クレアチニン値も低下するので、腎機能が悪くても、クレアチニン値が上昇しにくく、気付くのが遅れることがあります。注意が必要です。
- ・ **UA（尿酸）**：細胞が壊れたり代謝によって生じた老廃物です。尿酸の結晶が関節にたまると、痛風になりますが、その他にも腎結石や尿管結石、腎機能障害、動脈硬化の原因にもなります。ビールや牛肉・豚肉に多く含まれます。



## 糖代謝

- ・ **BS（血糖）**：食事が消化されると血液中の糖（ブドウ糖）は増えますが、膵臓からインシュリンが分泌されるので、糖は全身の細胞に取り込まれ、血糖値は下がってきます。しかし、インシュリンの分泌が少なかったり、働きが悪いと、血液中の糖がうまく細胞に取り込まれず、高血糖が持続します。この状態を糖尿病と言います。直前の食事の影響を強く受けるので、一回の検査で診断するのは難しく、次のHbA1cと併せて判断します。
- ・ **HbA1c（ヘモグロビンA1c）**：この1~2ヶ月の血糖値がどのようなであったかを知ることができます。BSのように直前の食事や運動の影響を受けることがないので、糖尿病を診断する上で信頼性の高い検査です。

## 甲状腺機能

- ・ **TSH（甲状腺刺激ホルモン）**：甲状腺ホルモンは代謝にかかわる非常に大切なホルモンです。多すぎると手の震えや発汗などの症状の他、心拍数が増加しすぎて心不全になり、命にかかわります。一方、少なすぎると体がむくみ、疲れやすく、コレステロール値が上昇します。非常に大切なホルモンですので、分泌量を調節するために、脳から出るTSHで甲状腺ホルモンの量を調節する仕組みになっています。TSHが極端に低い場合は、甲状腺ホルモンが出すぎていることを意味し、甲状腺の働きを下げる治療が必要です。また、TSH値が高い場合は、甲状腺ホルモンの分泌が少なくなっていて、もっと出すように脳が命令していると判断し、甲状腺ホルモンを補う治療をします。コレステロール値の異常には、甲状腺の病気がかかっている場合があります。